

## 内地ニ特發セルクキンケ氏限局性浮腫ノ一例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/30636">http://hdl.handle.net/2297/30636</a>

## 内地ニ特發セルクエンケ氏限局性浮腫ノ一例

金澤醫學專門學校內科學教室(主任田村博士)

金澤醫學士 森

謙

一一

限局性浮腫 (Oedema circumscriptum) トハ又神經性浮腫 (Neurotisches Oedem) ト稱シ、一八八二年クエンケ氏ニ依リ初メテ詳細ニ報告サレシヨリ、其病名ニ氏ノ名ヲ冠シ呼稱スルコトアリ。皮膚又ハ粘膜ニ卒然限局セル大ナル浮腫ヲ生ジ、痕跡ヲ留メズシテ消失スル疾患ニシテ、臺灣、上海、其他熱帶地ニ比較的多キガ如クナレドモ、歐米諸國及ビ我國內地ニ於テハ稀有ナル疾患ノ一ナリ。一九〇四年ヨリ一九一三年ニ至ル間ノ *Centralblatt f. Innere Medizin* ニ掲出サレタル歐米ノ報告例十數例ニ過ギズ。我國內地ニ於テハ西村、杉雨氏、坂田、下平、蔭山、坂口及ビ土肥氏等ノ十數例アルノミ。之レニ反シ上海、臺灣ニ於テハ風土病ノ一トシテ本邦人ノ多數罹患スルモノアルガ如ク、山田、壁島、長野、肥田、森氏等ノ多數病例ノ報告アリ。長野氏ノ臺灣ニ於ケル百八例ノ報告ニ據レバ土人ニ比較的少クシテ、本邦人ノ渡臺セルモノ一定期間ニ於テ發病スルコト多キガ如シ。本邦ニ於ケル病例モ土肥氏ニ據レバ上海、臺灣及ビ比律賓等ニ旅行シ彼地ニ於テ罹患シタルモノ、歸朝後再發セルモノ多シ。我國內地ニ於テ特發セルモノ極メテ稀ナルガ如シ。

最近余ハ内地ニ特發セル本病ノ一例ヲ得、一二ノ實驗ヲ行ヒ人工的ニ浮腫ヲ發生セシメ、且ツ浮腫前後ノ血清ヲ「レフレクトメーター」ニテ檢シタルニ依リ報告セントス。

## 實驗例

患者。芝田某、男、三十八歳、富山縣射水郡ノ農、北陸以外ノ地ニ旅行

シタルコトナシト云フ。

## 血族的關係

父ハ六十八歳ニシテ四十歳ノ頃癱瘓質斯チ患ヒシノミ  
ニテ健在、母ハ六十歳健康ニシテ同胞六人アリ皆健。

既往症

患者ハ生來健ニシテ著患ナシ、七、八歳ノ頃誤テ右手腕ヲ熱湯中ニ投シ火傷ス。次テ十二、三歳ノ頃高サ三十五、六尺程ノ柿木ヨリ墜落シ左側肩胛部ヲ打チシモ大事ニ至ラズシテ治癒セリ。爾來仕事ニ際シ、右下肢ヲ後方ヘ回轉スルコト時ニ不能ナリシガ二、三年ニシテ自然ニ消失セリ。又三十六歳ノ頃右第十肋骨ヲ打チ二個月ニシテ治セリ。淋疾及微毒ノ既往症ナシ、酒及煙草ハ若年ノ頃ヨリ好ミ普通一日三合ニシテ二十五乃至三十歳頃ハ極限一升ナリシト。近年飲酒スレバ下痢ヲ來スニヨリ、酒及煙草共ニ自然ニ好マザルニ至レリ。

主訴

患者寒氣ニ遭ヘバ身体露出部ニ浮腫ヲ生ズ。浮腫ハ普通色又ハ稍蒼白ニシテ毫モ癢痒ナク、緊滿、蟻走様感及寒冷感アルノミ、浮腫高度ノ時ハ多少其部ノ運動障礙ヲ來スコトアリ。多クハ無熱ナルモ、身体大部ノ寒冷ニ遭ヘバ惡寒ヲ以テ發熱スルコトアリ、依テ患者診ヲ乞ヘ

入院ヲ命ジ患者ノ左上肢肘關節以下ニ院內使用水道ノ水(當時攝氏十度)ヲ灌注セシメタルニ、一二分ニシテ漸次其部ノ皮膚蒼白トナリ所々大豆大ノ浮腫ヲ呈シ、時ト共ニ結合シテ數分後肘關節以下一面ニ腫脹ヲ來セリ。境界ハ明カニシテ水ニ浸シタル部位ヨリ一線ヲ以テ區劃サレ稍々輕度ノ發赤ヲ呈スルヲ認メタリ。自覺的ニ疼痛又ハ癢痒ナク、緊滿、蟻走様感アリテ其他多少寒冷感ヲ覺エ、輕度ノ全身違和、倦怠感アリ。体温後稍々上昇シ卅七度五分位ナリシモ食慾尋常ナリキ。他覺的ニ手ヲ以テ患部ニ觸ルルニ明カニ他ヨリ溫暖ニシテ較々硬キモ指壓ニヨリテ凹痕ヲ見ズ。指骨ハ浮腫ノタメ多少運動障礙ヲ來セリ。冷水浮腫試驗前後ノ前膊ノ周圍ヲ計算シタルニ圖ニ示ス如キ成績ヲ得タリ。即チ

左ハ右ニ比シ冷水試驗前即チ健康時右腕ヨリモ稍々小ナルニ關ハラズ、冷水10ヲ作用セシムレバ數分ヲ出デズシテ各部周圍ノ増大アリ。就中Aノ部ハ二耗、中指ハ〇五耗ノ増大アリタリ。

前膊ノ周圍ヲ計ルニ尺骨上端ノ內側ヨリ下端內側ニ至ル中間ヲ起點トシ假リニAト名ケ、Aヨリ上方六耗ノ點ヲB

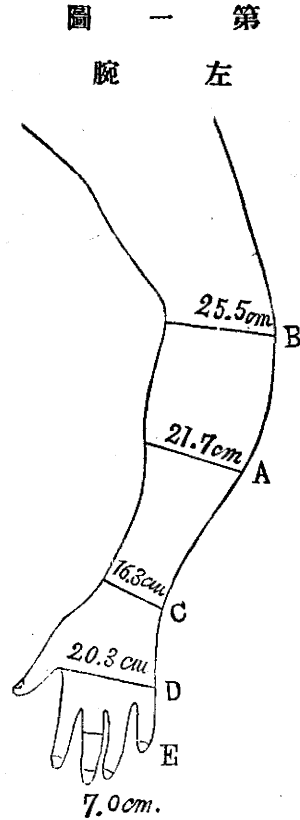
現病歴

五六年前ヨリハ何等認ム可キ原因ナクシテ寒氣ニ遭ヒテ異常ナキモ、冷水ニ浸ス時ハ其部ニ僅カニ浮腫ヲ來セリ。以上ハ冬期ニ表ルル現象ニシテ夏期ニ於テ見ズ。大正七年正月頃ヨリ漸次増悪シ、寒氣ニ遭ヘバ其露出部ニ浮腫ヲ生ジ、冷水ニ浸セバ直ニ局部ニ浮腫ヲ發スルニ至レリ。夏期ニ於テハ冷水ニ長ク浸スニ非ラザレバ發ザリシト云フ。寒冷ノ期ニ及ビテ浮腫ヲ來スコト著明トナリ、外出スルニ當リ充分身体ノ全部ヲ防寒シ顔面、頸部、手腕關節、足關節等ヲ完全ニ包埋セザレバ歸宅後該部ニ浮腫ヲ來スト。

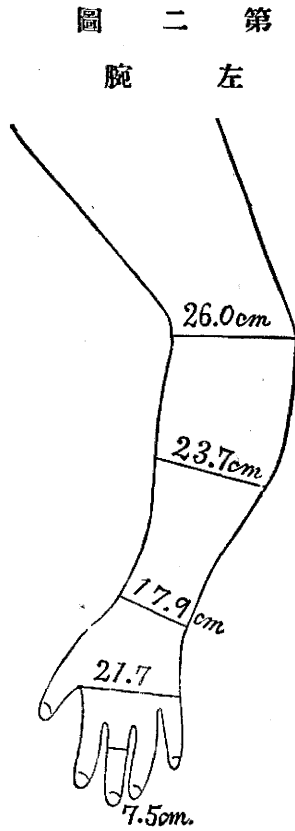
現症

体格營養共ニ良好ニシテ全身ノ發育又良。内臟、骨、淋巴腺等ニ異常ヲ認メズ腿反射機能尋常、尿中糖及蛋白質ヲ證明セズ。「ワッセルマン反應」ハ陰性ヲ呈セリ。便中アスカリス卵ヲ認メタリ。

浮腫試験前



浮腫試験後



チ左腕ノ静脈血ト浮腫試験ヲ行ヒシ右腕トヲ比較スルニ浮腫ノアル方ハ蛋白質質量減少シタリ。即チ蛋白質質量ノ減少ハ浮腫後ニ於テ起リ且ツ浮腫ノ部位ニ限局セル現象ナルヲ知ル。

下方十耗ノ點ヲCトシ尙ホ小指ノ指骨第一節下端ヨリ示指ノ同一部位ニ至ル一線ヲDトシ中指ノ指骨第二節下端ノ周圍ヲEトセリ。

翌日再ビ右手ニ同一試験ヲ反覆セシニ凡テ同一結果ヲ見タリ。

當時ノ寫眞ニ於テモ明瞭ニ其浮腫ノ高度ナリシヲ見得ルニ依リ是所ニ提ゲタリ。

冷水浮腫試験前後ニ於テ肘靜脈ヨリ血液ヲ採リ、氷室ニ於テ凝固セシメ、溶血セザル様注意シ、其ノ血清ヲ同一條件ノ下ニ分離シ「レフレクトメーター」ニテ其含有蛋白質質量ヲ定量シタルニ左表ノ如ク試験前ノモノハ浮腫試験後ノ血清ニ比シ多量ノ蛋白質ヲ含有スルヲ知レリ。尙ホ右腕ニ於テ同一試験ヲ行ヒシ際健康側即

表 二 第

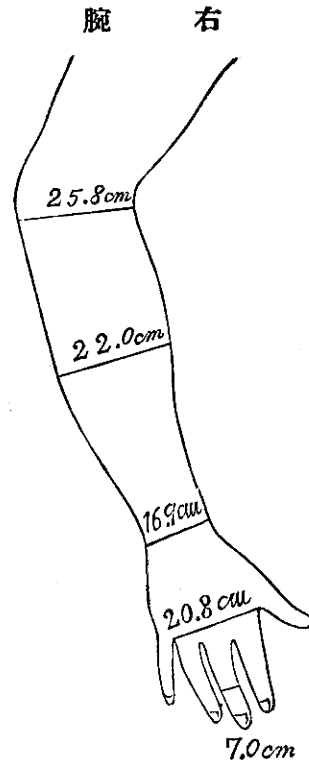
第二回	第一回
左腕浮腫後(廿四時間) 右腕浮腫後(約十分)	左腕浮腫前 同 浮腫後(約十分) 同 浮腫後(數時間)
八、六五% 八、一九%	八、七五% 八、二% 八、五%

浮腫前後ノ血清蛋白量

表 一 第

同 十二月 十日	同 十一月 十一日	大正七年 十二月 十二日		
第二回	第一回	第一回		
右側浮腫前 同 浮腫後	左側浮腫前 同 浮腫後(約十分) 同 浮腫後(數時間)	左側浮腫前 同 浮腫後(約十分) 同 浮腫後(數時間)		
二五、八 二六、五	二二、〇 二二、七 二二、三、二	二五、五 二六、〇 二五、八	B	
二二、〇 二二、八	二二、七 二二、五	二一、七 二一、三、七	A	
一六、九 一八、一	二〇、八	一六、三 一七、九	C	
七、〇 七、五	七、二	二〇、三 二一、七	D	
		七、〇 七、五	E	

圖 三 第



浮腫 試 前 驗

原 著

森川内地ニ特發セルクビシク氏限局性浮腫ノ一例

ノ言ニ從ヘバ一般ニ浮腫部位ヲ温ムル時ハ早ク消散シ、其儘  
放置スル時ハ數日間存在スルコトアリト云フ。消退後ハ何等  
ノ痕跡ヲ認ムルコトナク、且ツ何等ノ自覺的症狀ヲモ殘サズ。  
人工的浮腫發生ハ上肢ニ於テノミ行ヒタレドモ寒冷ノ候、外  
氣ニ曝露セバ顔面、下肢、軀幹ニ於テモ寒冷刺戟ヲ得タル部

如是限局性ノ血清蛋白質含有量ノ減  
少ハ水分ノ過多ヲ示スモノニシテ限局  
性浮腫部ニハ限局性水血症存スト云ヒ  
得ベシ。尙ホ浮腫前後ニ肉眼の血液ノ  
變化トシテ試驗前靜脈血ニシテ暗赤色  
ナリシモノ浮腫後ハ同一靜脈ヨリ瀉血  
スルニ常ニ鮮紅色ヲ呈シ一見動脈血ナ  
ルヲ知リ得タリ。

冷水刺戟ニヨリ人工的限局性浮

腫ヲ發生セシメタル後ハ身体ノ違  
和ヲ訴ヘ惡寒アリ。恰カモ感冒ニ  
罹リタルガ如クナリト云フ。浮腫  
ハ數時間後漸次消失シ、翌日ハ尙  
ホ輕度ニ之レヲ認メ得タリ。患者

位ニ明劃ナル境界ヲナシテ吾人ノ實驗シタルモノト同一浮腫ヲ發スト云フ。粘膜ニハ之レヲ發生スルコトナク、氷又ハ冷水等ヲ飲用スルモ口腔ニ浮腫ヲ見ズ。又冷氣ヲ呼吸スルモ呼吸器ニ特別ノ障礙ヲ來スコトナシト云フ、故ニ本例ハ寒冷ノ刺戟ニヨリ發生スル限局性浮腫ニシテ粘膜浮腫ヲ伴ハザルモノト思ハル。

原因ニ就テ之レヲ文獻ニ徵スルニ今日迄尙ホ不明ナリ。

ホワイチング氏ハ遺傳ノ確定セルモノ屢々ナリト云ヒ、クルシユマン氏ハ血管収縮性家族ニ之レヲ多ク見、テイー  
ル氏ハ家族中ニ神經質ノ多キヲ述べ、メンデル氏ハ先天性特異質アルコトヲ述べタレドモ、本例ハ何等神經質ノ遺傳  
ト認ムベキモノナク、且ツ患者ハ家族ニ自己ト同一病者ヲ知ラズト云フ。其ノ誘因トシテ諸家ノ擧ゲタルモノ亦多種  
多様ナリ。胃腸障礙、痺麻質斯、外傷、飲酒、微毒、ヒステリー、精神感動、月經來潮等ナリ。本病例ニ就テ檢スルニ  
微毒ハ存在セザルガ如ク、ワッセルマン氏反應ハ陰性ニシテ胃腸病、精神感動亦ナシ。外傷トシテ幼時火傷ヲ受ケ、且  
ツ高所ヨリ墜落セル等アレドモ現病發病年月トノ間ニ長年月ノ間隔アリ。之レヲ以テ本例ノ發病誘因ナリト斷ジ難  
シ。只飲酒ハ患者生來ノ嗜好ナリシガ如ク、殊ニ發病後ハ飲酒セバ下痢ヲ來ス様ニナリシ等本病ト何等カノ關係アルカ  
ノ如ク思ハシム。カスバリ、オツペイハイム、シユレージンゲル、ブローツ、ジロツチ氏等專ラ飲酒ニ其因ヲ求メ  
ントセリ。又皮膚ノ冷却ヲ直接ノ浮腫發生誘因トスルモノアリ(クキンケ、リール、コリニス氏等)。一九一〇年ロック  
ウエル氏ノ報告セル一例ノ如キハ本例ト能ク一致シタル病例ナルガ如ク、三十八歳ノ男子ニテ夏期ニ何等ノ異常ナ  
ク、冬期ニ寒冷ニ接シタル部位ニ數分ナラズシテ浮腫ヲ起シ、其甚ダシキ時ハ尿量ノ減少ヲ見タリト云フ。余ノ一例  
ニ於テモ浮腫ハ寒冷刺戟ノ存セシ部位ニ出現シ、人工的ニモ之レヲ寒冷刺戟ニテ出現セシメ得タルモノナレバ明カニ  
寒冷ガ其直接原因ナリト云ヒ得ベシ。或ハ一定ノ食物(カニ、イチゴ等)ニ對スル特異素因ナリト云フアリ、種々ナ  
ル飲食物ニ對スル「アナフヒラキシ」ニ關係スルモノナリ(山田氏)ト論ズルアレドモ余ノ病例ニ於テハ全ク是ノ如キ  
點ニ關係ナシ。

臨床上ノ症候ニ就テハ種々ナル報告ヲ綜合スルニ各人ノ病例必ズシモ全然一致シタルモノナラザルガ如ク、アルマン、及ビサルボナー氏等ノ如キハクキシケ氏浮腫ニ二種アリト稱シツツアリ。只卒然トシテ皮膚又ハ粘膜ニ限局シテ大ナル浮腫ヲ生ジ、一定時間後痕跡ナク消失スルモノヲ總括シテ本病トナシタルモノニシテ其原因、其本態ニ尙ホ不明ノ點多ケレバ隨テ臨床上尙ホ種々一致セザルモノナル可シ。普通癩痒、疼痛ヲ缺クト云フ(オツペンハイム氏)アリ。全然癩痒ヲ必發病症ナリト述べタルモノアリ(長野)。全身症狀ハ一般ニ侵サレザルコト多ク概シテ無熱ニ經過スト云ハル。浮腫形狀ハ一定セズ、團子又ハ饅頭形ヲナシ、又ハ索狀ヲ呈シ其大サモ種々ナリト云フ。四肢ノ全領域ヲ占ムル如キアリ、唯一錢銅貨大ナルアリ。其色ハ皮膚ノ常色又ハ多少白ク透射シ、稍々蒼白ノ感アリ、時ニ少シク潮紅ヲ呈スルコトアリト云ヒ、テーリス氏ノ一老人ニ見タル報告ニハ鬱血甚ダシク暗赤色ヲ呈シタリト。然レバ凡テ合併症ノ存在等ノ其症候ニ著シキ差違ヲ來スコトモアルガ如シ。余ガ病例ハ癩痒ヲ感ゼズ即チ臺灣ニ於ケル長野氏ノ報告トノ點ニ於テ差異アリ。全身症トシテ身体感冒ニ罹レルガ如キ違和感ヲ起シ、輕熱アリ。浮腫部ノ皮膚色ハ寒冷刺戟ノ初メ數秒間ハ蒼白ニシテ漸時潮紅シ極度ノ浮腫時、桃紅色ヲ呈ス。境界ハ明瞭ニシテ寒冷刺戟ノアリシ部ニ限レリ。長野氏ニヨレバ胸部、脊部、頸部、前額ニ於テ境界明カナレドモ、手及ビ手指ニ不明ナリト云ハルモ、本患者ハ四肢ニ於テモ明割ナル境界アル浮腫ヲ發生ス。クキシケ氏浮腫ハ輕症ナラバ一局所ニ止リ、直チニ消散スルモ、時ニ一部消散シ又他部ニ發生シ屢々出沒スルコトアリト、然シテ該浮腫ハ數時間ニシテ其大サ極度ニ達シ、多クハ一日ノ間ニ全然痕跡ナク消失スルモ、四、五日ニ及ブアリ、長野氏ノ例ニ於テ多クハ二乃至十日間存ジ殊ニ下唇右側ノ浮腫ハ三、四ヶ月、右足ノ浮腫ニ於テ三ヶ月ニシテ消失セシモノアルモ本患者ノハ浮腫發生後ノ外界温度ニ關係シテ遲速アルガ如シ即チ温暖ナル室ニ居ル時ハ一日ニシテ消失シ、寒冷中ニ存ズル時ハ長期間存在スルモノナリ。

部位ニ就テハ多ク顔面殊ニ頰部、眼瞼等最モ多ク、四肢、陰部モ比較的多少稀ニ軀幹ニ來ルト云フ。エム、モリス氏ハ顔面陰部ニ多シトシ、山田氏ハ主ニ右頰ニ發シ時ニ頸側ニ腫脹ヲ生ジ垂下スルコトアリト述べ、長野氏ノ罹病率

ヲ見ルニ上肢ニ、七〇。顔面ニ、四四。軀幹ニハ、四三。下肢ニ、三一。ニシテ、三回ハ頭部ニ來タリシト云フ。肥田氏ハ身体ノ露出部ニ發生スト云フ。又皮膚以外ニ稀ニ粘膜ヲ侵スコトアリテ呼吸器ニアリテハ稀ニ咽頭、喉頭、氣管、鼻腔ヲ侵スコトアリ、其部位ニ應ジテ危險症狀ヲ呈ス可シ。既ニ窒息死ヲ起シタル報告例アリ(メンデル、ストロイスレル、ホワイチング)又消化器ニ於テ舌、口腔ヨリ胃腸粘膜ニ來ルコトアリ(クキンケ、ストリユーピング、チルリング)、余ガ病例ニ於テハ粘膜ニ來ルコトナク、只皮膚面ニ蔽ハレタル部ノミニ出現シ、自然的ニ衣服外ニ露出シタル顔面、手、足ニ多ケレドモ凡テ寒冷刺戟ヲ與フレバ凡テノ部位ニ發生シ得。其他極メテ稀ニ骨膜、腱鞘ヲ侵シ又筋肉、關節或ハ粘液囊ニ來リ、深部結締織ニ來ルコトアリト云フ。余ノ例ニ於テハ之レヲ認メザレドモ寒冷刺戟アリテ浮腫ヲ起シタル部位ノ血液ハ明カニ水血症ヲ起シタルヲ證明シタリ。要スルニ本症ハ皮膚及皮下結締織ニ主ニ生ズルモノナレドモ稀ニ深部ノ結締織及ビ臟器、粘膜ニモ來ルモノニシテ隨テ限局性水血症ヲモ起スモノナルガ如ク、單ニ皮膚ノ浮腫ニ限ラザルガ如シ。

本病ノ如ク限局性ニ浮腫ヲ發生スル其病理ニ關シテハ從來諸家ノ說ク所未ダ歸一スル所無キガ如シ。單ニ血管運動神經ノ作用ナリヤ。又神經其他ノ作用ガ血管壁ニ直接ニ作用シ其壁ノ水分ニ對スル通過度ニ變化ヲ來スモノナリヤ、速カニ斷言シ難キモ肢端知覺異常症、紅斑性疼痛症、レノ一氏病等ノ如ク血管運動神經ノ障礙ナリトスルモノ多シ。クキンケ氏ハ血管神經ノ殊種ノ作用ニヨリテ血管壁ノ滲透力ニ變化ヲ來スモノトシ、ウンナ氏ハ靜脈緊張ノ高マリシ者ニシテ鬱血性浮腫ノ一種ニ外ナラズト見做シベルネル氏ハ單ニ其局部ノ大血管ノ血壓ノ高マル結果ナリト云フ。余ノ患者ニ就テ局部ノ靜脈ニ鬱血ヲ見ルコトナク、却テ鮮紅色ノ動脈血ヲ認ムルヨリセバウンナ氏ノ云フ如キ鬱血性浮腫ナラザルガ如シ。クルシユマン氏ハ一般浮腫ニ鹽類ノ蓄積ノ關係スルガ如ク、何等カノ中毒ニ因スル浮腫ニシテ本病ヲ内因性毒素ノ爲メニ發生シタル一種ノ神經質症ト看做シ恐ラク内分泌異常ト關係アラント論ゼリ。

要之、



森 論文 附 圖

左側上肢ノ10°Cノ冷水ニヨリ發シタル浮腫

第 四 圖



第 五 圖



本患者ハ三十八歳ノ男子ニシテ常ニ内地ニノミ住シ數年前ヨリ身体ノ一部ヲ寒冷ニ曝露シ又ハ冷水ニ浸ス時ハ其部ニ急性限局性浮腫ヲ起ス處ノ稀有ナル疾患ノ一例ナリ。

其原因ハ不明ナレドモ飲酒ニ關係アルガ如ク、又直接ニ浮腫ヲ起シ來ル誘因ハ寒冷刺戟ナリ。

攝氏十度ノ冷水ヲ灌水シ數分間ニ上肢ニ於テ人工的ニ限局性浮腫ヲ起シ得タリ。人工的ニ惹起シタル浮腫部ノ靜脈血ハ健側ノ同一靜脈ノ血液及ビ浮腫前ノ同一靜脈ノ血液ニ比シ、著シク鮮紅ニシテ動脈血ノ如クナリキ。

而シテ該血液ニ就テ「レフレクトメーター」ヲ用ヒ檢スルニ患部ノ血清ハ健康部及ビ浮腫試驗前ニ比較シ常ニ水血症ヲ呈シタルヲ知り得タリ。

本稿ヲ終ルニ臨ミ田村教授ノ始終懇篤ナル御指導ヲ賜リタルニ對シ謹ンデ感謝ノ意ヲ表ス。

## 引用書目

- 1) Zentralblatt für innere Medizin. 1904—1913.
- 2) H. Nottmangel, Specielle Pathologie und Therapie. XXIV. Band, I.
- 3) Handbuch der inneren Medizin V. Band Erkrankungen des Nervensystems.
- 4) 土肥慶藏著、皮膚科學上卷。
- 5) 長野純藏、急性限局性浮腫。(醫學雜誌 27, 425.)
- 6) 山田弘倫、清國上海附近ニ於ケル一種ノ皮膚病(限局性皮膚浮腫)ニ就テ。(皮膚 2, 3, 21.)
- 7) 今、皮膚病ト「マナフィライキ」。(日新 2.)
- 8) 大瀧綱家、浮腫ニ就キ。(順天 483, 1.)
- 9) Bank, Zur Aetiologie des "akuten angioneurotischen" oder unbeschriebenen Hautktems. Berliner klinische Wochenschrift. 1892.
- 10) Kürzner B., Ueber hydropische Anschwellungen unklaren Ursprunges. Berliner klinische Wochenschrift. 1889.
- 11) Joseph M., Ueber akutes unbeschriebenes Oedem. Berliner klinische Wochenschrift. 1880.
- 12) Golz, Ueber eine eigentümliche Form von Erythem. Deutsche Wochenschrift. 1880.
- 13) Strübing, Ueber akutes (angioneurotisches) Oedem. Zeitschrift für klinische Medizin. 1895.
- 14) 森文男、タキナト氏病ニ例。(醫學雜誌 1641, 1.)
- 15) 雙島爲藏、急性限局性皮膚浮腫ニ就テ。(成醫 327, 21.)
- 16) 坂口眞、急性限局性皮膚浮腫ノ講義。(順天 450, 79.)